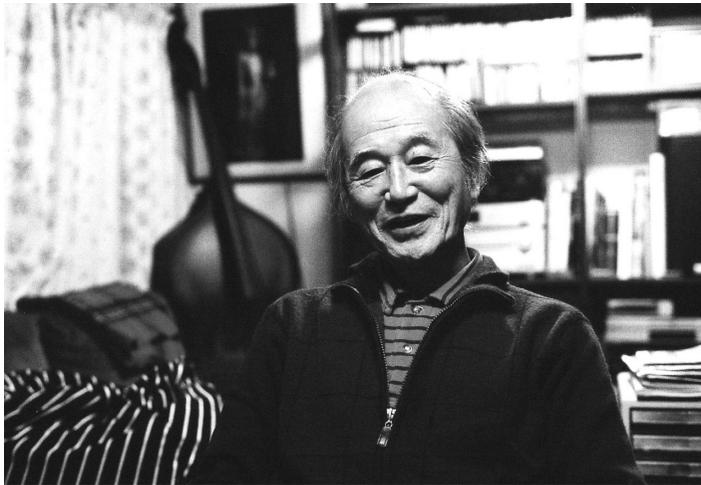


越智浩二郎先生を悼む ― みんなの「最後の砦」の越智先生

香川 克



1997年から2006年まで、9年間にわたって京都文教大学人間学部臨床心理学科で教授としてご活躍いただき、また2004年度から2005年度まで人間学研究所所長も務められた、越智浩二郎先生が、2017年4月23日に亡くなられました。

本学を退職なさった後は、千葉県船橋市のご自宅で過ごしておられました。私は、卒業生の越後顕一君と一緒に、年に一度くらいご自宅を訪問させていただいておりました。いつも温かく迎えて下さり、私たちはそれに甘えて、ずいぶんと言いたい放題をしていたように思います。今年の春にも越後君が訪問したい旨を越智先生に連絡させていただいたところ、越智先生から「体調不良なので、当分難しい」ということでした。先生のご体調を案じていたのですが、4月末に訃報に接することになってしまいました。最後にお会いした時にはまだまだお元気で、これからも様々なお話を聞かせていただけたらばかり思っていました……。残念でさびしい気持ちでいっぱいです。心からご冥福をお祈りした

と思います。

私の越智先生との初めての出会いは、1988年、私が東京大学の教育学部教育心理学科の4年生の時でした。文学部社会心理学科の1年交代の非常勤講師として、当時、国立精神・神経センター精神保健研究所におられた越智先生が講義をなさるとのことで、他学部聴講で受講したのです。その頃の越智先生は、50代前半ということになるでしょうか（思えば、今の私より2, 3歳上の年齢です）、精神保健研究所で心を病む方々との関わりを、デイケアなどの試みの中で深めていく営みを続けておられた頃でした。

その後、私が大学院に進学した後も、越智先生は、大学院の非常勤講師として、あるいは、心理教育相談室のOBとして、私たちにかかわって下さいました。

カウンセラーの訓練を兼ねた院生生活は、今も昔もそうなのかもしれませんが、いつも先が見えない苦しさを伴います。修論が書けない、

担当したケースが中断する、自分は果たしてこのクライアントにとって意味のあることができているのだろうか、そもそも自分は意味のある関係を他者と築くことができるのだろうか……。晩年の越智先生を訪問する中で、越智先生が「心理臨床の訓練は、もともと vulnerable なところがある人を、さらに vulnerable にするところがあるから……」とおっしゃっていましたが、私たち院生は、まさに vulnerability を大量に抱えていました。その中で、「最後は、越智先生がいてくれる」という感覚は、かなり深いところで私たちを支えてくれていたように思います。私たち院生にとって（そして、どうやら、私よりもかなり上の世代の先輩たちにとっても）、越智先生は、いつも「最後の『砦』」でした。問題を解決してくれるわけでもないし、自信を与えてくれるわけでもないのだけれど、「でも大丈夫」という感覚をいつも感じさせてもらっていました。

とはいえ、越智先生は決して「優しい」人ではなかったと思います。核にある部分の「厳しさ」は、相当苛烈なものだったのではないかと、私はずっと想像していました。想像するしかなかったのは、実際に越智先生に接する時には、私の側が越智先生の優しさに甘えてしまっていたからでしょう。

1960年代の末に、日本臨床心理学会の中での意見対立があり、臨床心理士の資格を推進する先生方が臨床心理学会を離れていった（そして日本「心理臨床」学会を立ち上げた）後も、越智先生は、日本臨床心理学会に残り続けられたこと。また、（ネットで検索できる先生のご経歴によれば）1981年から1991年まで、長きにわたり日本臨床心理学会の事務局長や会長を務められたこと。私はこれらのことを、事実として知るのみで、その中におられた越智先生を直接知るわけではありません。しかし、いささかなりともこのあたりの歴史的経緯を知る者としては、この端的な「事実」からだけでも、越智先生の「厳しさのような何か」の「核」を感じ取ることができます。

越智先生が1989年に書かれた論文に「あたり

まえのつきあいと専門性」という論文があります。この「あたりまえのつきあい」という他者へのかかわりのあり方は、論文中、「素人性」や「隣人性」のような、一見、優しくて易しそうな言葉と併記されています。しかし、論文を読んでいただければ分かりますが、「あたりまえのつきあい」は、優しくもなければ易しくもない。「あたりまえのつきあいは何によっても支えられるものではない、一人一人がしんどく担ってゆかねばならないもの」というような言葉で、なかなか困難なかわりであることが示されています。

その越智先生が、大学教員になる！しかも、京都で！私の周りの同期・先輩・後輩は、みんな驚きました。私は、「越智先生が行くところなら、大丈夫」と思い、京都文教大への着任を決めました（もちろん、それだけではありませんが）。私にとって、京都への異動の際にも、越智先生が「最後の『砦』」だったように思います。

京都に来てから、大学院のカリキュラムを巡って、ある作業を越智先生としたことがあります。越智先生の研究室での作業の中で、私は、ふと「まさか、越智先生と、京都の大学で、臨床心理士養成の大学院カリキュラムの仕事をすることになるとは思いませんでした」とつぶやいてしまいました。越智先生は「ほんとだねえ」と一言。あの言葉の響きは、いつまでも私の耳に残っています。

京都での越智先生は、やはり、学生たちにとって「最後の『砦』」だったのではないかと思います。あたりまえに「なにもせず、ただそばにいる」というつきあいの中で、特に支えようという素振りをみせるでもなく、学生とともに「今、ここ」に存在し続け、そして、そのつきあいの中で、学生たちは越智先生に深く支えられていたように思います。

大学院生だったM君の修士論文の個別指導をしている時に、越智先生がずっこけて椅子から落ちそうになった、という話を間接的に聞きました。修士論文の状況がよほどの状況だったようです。結局、その学期は、M君は修士論文を

提出せず……。その時は、「越智先生を椅子からずっこけさせるなんて!! (すげえ!!)」と心から思いました。どこか、自分も院生のような気分で「M君、すごいなあ、そこまで越智先生を驚かせるなんて」と、感心するような、うらやましいような、不思議な心持になったことを覚えています。

最後に、越智先生の論文「あたりまえのつきあいと専門性」の末尾の部分を引用させていただきたいと思います。こんなことをすると、越智先生には、それこそ本気で怒られるかもしれませんが、2017年の社会に向けて、越智先生のこの言葉を、もう一度、解き放つてみたいという誘惑に抗うことができません。

はっきり云えることは、現行の資格でその条件に唱っているものは、心理療法、心理診断、リサーチ、地域活動（それも科学技術的な）と、すべていちおう科学的専門性であり、そういう資格を頂いてしまうと、どうしても「あたりまえのつきあい」の一回性、実存性はますますその人から遠ざけられてゆくだらうということ。 “いや違う、そういう資格で基盤を得て、その保証をもとに勇気をもってあたりまえのつきあいに挑戦できるようになるのだ” といった幻

想にもとびつきたくなる私自身もないわけではないのですが、それはウソであるとも一方では信じています。

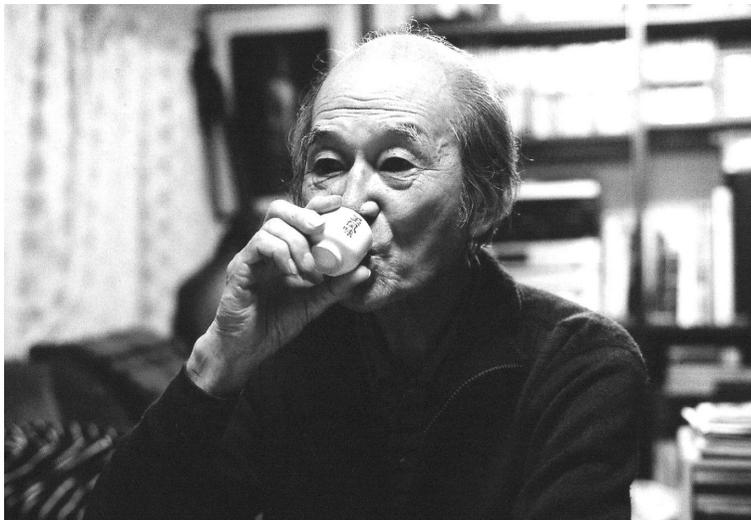
あたりまえのつきあいは何によっても支えられるものではない、一人一人がしんどく担ってゆかねばならないもの、とわかっていながら、しかし、何かの支え、保証があってもいいのではないかとついつい考えてしまいます。その支えとは、「共に」とか「される側に」といった考え方とそう遠いところにあるものではないだろう、しかし、それらのコトバをスローガン化し、その中身、論理、方法を十分吟味、検討してこなかったツケが今まわってきているのだろうと思えてなりません。

越智浩二郎 (1989) 「あたりまえのつきあいと専門性」臨床心理学研究第27号別冊 pp16-25.

越智先生、長い間ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。

私は、これからも、越智先生の残された言葉に支えられ続けることだろうと思います。

さようなら。



写真提供：越後顕一氏（本学臨床心理学研究科修了生）